ASLE-Japan / 文学・環境学会

# NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan
April 26. 2003. No. 14

**【役員名簿（2002-2004）】**

代表
山里勝己（琉球大学）
副代表
高田賢一（青山学院大学）
生田省悟（金沢大学）
事務局幹事
高橋勤（九州大学）
喜納育江（琉球大学）
会計
小谷一明（新潟女子短期大学）
近江満里子（東京工科大学・非）
監事
西村頼男（阪南大学）
ニューズレター編集委員
上岡克己（高知大学）
結城正美（豊橋技術科学大学）
山城新（琉球大学）
会誌編集委員
村上清敏（金沢大学）
伊藤詔子（広島大学）
石幡直樹（東北大学）
木下卓（愛媛大学）
Bruce Allen（順天堂大学）
運営委員
コンピューターセンター
岩政伸治（白百合女子大学）
山城新
大会運営
赤嶺玲子（富士短期大学）
大神田丈二（山梨学院大学）
小田友弥（山形大学）
関口敬二（大阪府立大学）
巽孝之（慶應義塾大学）
中村邦生（大東文化大学）
横田由里（広島中央女子短期大学）
吉崎邦子（福岡女子大学）
吉田美津（松山大学）
研究助成
稲本正（オークビレッジ）
岡島成行（日本環境フォーラム）
野田研一（立教大学）

## 国際シンポジウムを終えて

代表　山里勝己

３月４日から７日まで、琉球大学を中心に開催されたASLE-Japan/文学・環境学会主催の国際シンポジウムは、学会が一丸となって実現に努力した結果、成功裡に終了することができました。長い準備期間を経て開催にこぎつけた国際シンポジウムですが、事務局・役員の献身的な仕事と会員各位のご協力で、国内や外国からの招聘講師の皆さまにも満足できる内容になったのではないかと考えています。

シンポジウムでは、「自然--都市、田園、そして野生」（“Nature: Urban, Rural, Wild”）を総合テーマに、基調講演、３つのシンポジム、個人発表があり、朗読会も行われました。詳細は、それぞれの報告に譲りますが、今回のシンポジウムはあらためて研究分野としての環境文学の広がりと新たな可能性を確認させるものであったと感じています。総合テーマにふさわしい、多彩な研究報告と意見交換がなされました。これを契機に、ASLE-Japan の研究領域が多様なかたちで拡大され、研究のさらなる深化と発展につながることを期待したいと思います。また、日本発の国際的な学術貢献がなされ、国内外における研究連携もさらに充実されることを期待したいと思います。

これから論文集の刊行について検討を始めますが、来年の３月あたりを目処に出版する予定です。東アジアから発信される ASLE の論集として、充実した内容になると考えています。

共催の読売新聞と琉球新報は、一面を割いてシンポジウムの報告をしております。学会の存在と、研究分野としてのこの領域の重要さをアピールすることができたのではないかと考えています。また、現在の日本の経済状況でこのようなシンポジウムが開催できたことについて、協賛・後援各社のご理解とご支援に深く感謝申し上げたいと思います。

ASLE-Japan もやがて設立１０年目を迎えます。学会と各会員が今回の国際シンポジウムの成果を熟成させつつ、新たな研究の展開がなされることを期待いたします。

## --ASLE-Japan 国際シンポジウム報告--

喜納育江（琉球大学）

2001 年に構想され、2002 年 5 月に国際シンポジウム企画実行委員会を発足させて準備をすすめてきた ASLE-J 主催の国際シンポジウムが、2003 年 3 月 4 日から 7 日まで、琉球大学法文学部新講義棟において開催された。讀賣新聞共催、スウォッチ・グループ・ジャパン、EM 研究機構、EM 商事、熱帯資源植物研究所、武富士の後援によって実現した大会であった。初日の 3 月 4 日は、午後 2 時半から始まり、開催会場である琉球大学の森田孟進学長による歓迎のあいさつに続き、山里勝己代表のあいさつ、そして、山里代表によって基調講演者であるゲーリー・スナイダー氏が紹介された。当日はあいにくの悪天候だったにもかかわらず、スナイダー氏の講演を聴こうとつめかけた会員、一般市民、学生など合わせて約 200 名の聴衆で会場はほぼ満席の状態となった。期待通り、刺激的で先端的な提言に満ちた基調講演であった。その詳しい内容については別項で述べられているとおりである。基調講演後、買い求めたスナイダー氏の著書にサインを求める聴衆で図書展示販売コーナーが一時サイン会のように騒然としたが、スナイダー氏が快く応じてくださったおかげで、聴衆も現代詩、環境思想の重鎮とのおもいがけない和やかな交流の機会に満足した様子だった。

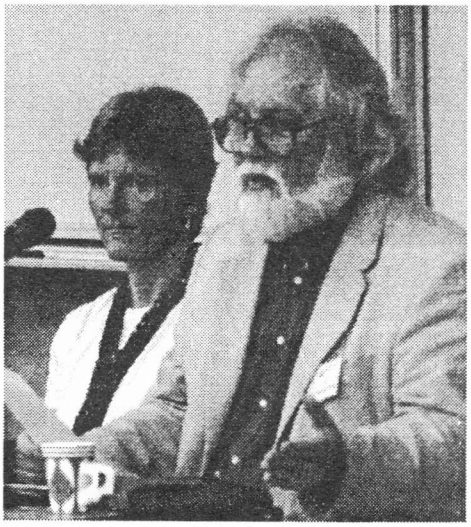
その後、かねひで都パレスで 2 時間ほど行われたレセプションでは、今回の招聘講師で、この国際シンポジウムの仕掛け人の一人でもある、ASLE-US 代表のスコット・スロヴィック氏からごあいさつをいただき、続いて讀賣新聞東京本社編集局文化部の岡崎裕哉氏、EM 研究機構から取締役の大金良彦氏からごあいさつをいただいた。その後、スウォッチ・グループ・ジャパンの代表取締社長のブルース・ベイリー氏のごあいさつで乾杯が行われた。レセプションでは、高良勉、与那覇幹夫、川満信一という沖縄の詩人各氏が自作の詩を披露した。高良氏は「喜屋武岬」を日本語とウチナーグチ（沖縄語）で朗読、与那覇氏も詩集『赤土の恋』より「死骸（みいら）の海」、川満氏が「鷹」をそれぞれ朗読し、沖縄の風土をベースとして湧き立つ独特の詩的想像力をアピールし、会場を感動させた。

その後、余興として、琉球大学の学生諸君による郷土舞踊が披露された。まず、法文学部英米文化専攻 2 年次の平良真理さんにより、琉球古典舞踊の演目「かせかけ」、そして「加那ヨー」が演じられた。平良さんは、地元の芸能舞踊コンクールで最高賞を受賞する腕前で、その雅な舞踊に会場は魅了された。（平良さんによれば、スナイダー氏がたいへん感激し、その舞い姿にインスピレーションを得て創作した詩を後で送ると言ってくださったそうである。）その後、八重山芸能研究会という学生サークルにより、八重山の庶民の踊りである「じっちゅ」と「浜遊び」が演じられた。生き生きと躍動感あふれる踊りの締めはやはり沖縄らしく「かちゃーしー」で、舞台から降りてきた学生たちとともに、国内外の招聘講師を含む全員が思い思いの姿で踊りを楽しんだ。学会のレセプションとしては前代未聞

のスタイルだったかもしれない。

3月5日の2日目は、シンポジウム1で午前のプログラムが始まった。司会は、山里勝己氏、パネリストにスコット・スロヴィック、シェリル・グロットフェルティ、巽孝之、そしてロバート・マイケル・パイルの諸氏を迎え、この国際シンポジウムの総合テーマと同じ「自然―都市、田園、そして野生」というテーマでそれぞれの論考を発表した。午後は、会員3名による研究発表が行われた。まず、松山大学教授の吉田美津氏による「"Home－a Place I Know Best"―ベトナム系アメリカ文学における風景とアイデンティティ」、次に中央大学大学院生の川谷弘子氏の「都市を離れて田園へ、その先に見たものは―知性と野生との格闘 *The Old Man and the Sea* 考察」、そして早稲田大学助手の中垣恒太郎氏の「ワイルド・ワイルド・ウェスト―西部体験から見るマーク・トウェインの主体形成」が発表された。

5日の午後のもうひとつのイベントは詩人や作家による自作の詩や小説の朗読会であった。まず、パイル氏が小説『ビックフットの謎～怪物神話の森を』から、次に、沖縄の作家、崎山多美氏が小説『ムイアニ由来記』からの抜粋を朗読した。さらに韓国の国民的詩人、高銀氏が「春の日が過ぎゆく」、「第一人称悲しく」の2編を朗読した。そして、最後にスナイダー氏が *No Nature* から5編の詩を朗読した。作家や詩人たちが自らの声で発することばに伴う音楽のような心地よさや温かみ、そして時には熱気が会場全体を包み、ことばとの一体感を十分堪能できる意義深い朗読会であった。



3日目の6日は、午前のシンポジウム2「アジアの自然と文学」で始まった。司会は野田研一氏、パネリストに高銀氏、台湾の劉克襄氏、森崎和江氏、崎山多美氏が並び、最後にコメンテーターとしてのコメントをパイル氏が行った。日本、韓国、台湾、沖縄のそれぞれから、それぞれのパネリストがその風土で得た環境へのまなざしや感性を発信した点において、ASLE の国際シンポジウムをアジアで行う意義というものが集約されたシンポジウムであったといえる。続いて同日の午後はシンポジウム3「環境から何を学ぶか」が行われた。司会は、元讀賣新聞文化部部長で、エッセイストの乳井昌史氏がつとめ、パネリストには、加藤幸子、カレン・コリガン＝テイラー、高田賢一の諸氏が名を連ねた。このシンポジウムに引き続き、会員による研究発表が行われた。まず、明星大学助教授、茅野佳子氏による「アフリカ系アメリカ人の歴史と環境的公正―リチャード・ライト『1,200万人の黒人の声』における田舎と都市の環境を読む」が発表され、次に琉球大学非常勤講師の山城新氏によって「沖縄文学と環境的正義：基地問題と環境問題の接点」が発表された。また、英語での発表では、広島大学教授の伊藤詔子氏が "T. T. Williams's Leap: From the Utah Desert to *The Garden of Delights*"そして、順天堂大学教授のブルース・アレン氏が "Facing the Real Costs of Living: Arundati Roy and Ishimure Michiko on Dams and Writing"という演題で発表した。

3日間に渡る国際シンポジウムは大盛会のうちに幕を閉じた。閉会の辞として、山里代表より、この国際シンポジウム全日程の総括と同時に、協力をいただいた多くの方々の努力に謝辞が述べられた。招聘講師の方々、スポンサーの方々、そして学会の企画実行委員はもちろんのこと、そのほかにも、学生をはじめとする琉球大学のスタッフなど、直接学会とは関わりない多くの方々の協力によってこの国際シンポジウムが成功のうちに終えることができたことへの謝意が伝えられた。

お別れ会は那覇市栄町の「うりずん」で行われた。戦前の古い沖縄の家屋をそのまま残した風情あるその小料理屋の2階は、収容制限人数50名を越え、床が抜けないか心配したくなるほど大勢の参加者で埋め尽くされ、それぞれのテーブルの話題で賑わう大盛会となった。また、スロビック氏の閉会のスピーチの際、今回の全発表を通訳してくださった通訳の渡辺京子氏と、田口可祐氏の優れた仕事に対し謝辞が述べられた。残すは7日のフィールド・トリッ

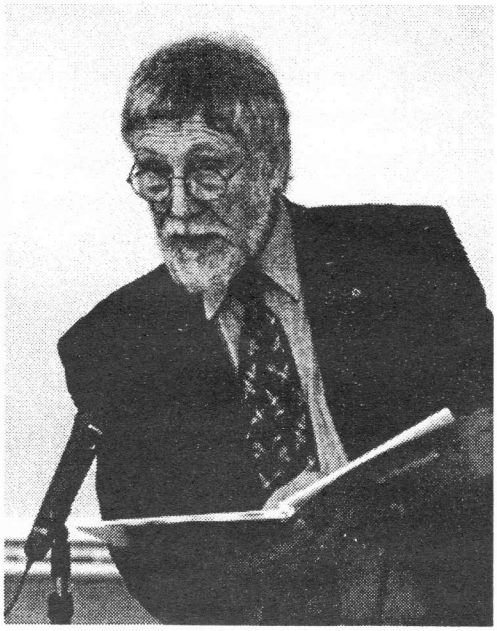
プのみというところで、各人がこのシンポジウムでのそれぞれの役目を無事に終えた安心と喜びを分かち合ったひとときだった。

スナイダー氏の基調講演の概要など、この国際シンポジウムの内容は、共催である讀賣新聞、琉球新報のほか沖縄タイムスなどの紙面で報じられた。讀賣新聞の松本由佳記者、琉球新報文化部長の慶田城健仁氏の働きによるものが大きかったと思われる。また、讀賣新聞社のカメラマンの坂口祐治氏には、学会用の記録資料としてデジタルカメラによる画像をたくさんお送りいただいた。この他にも、事務局では手のおよばぬところを多くの方々に支えていただいたことへ心から感謝し、シンポジウム報告とさせていただきたい。

## 基調講演

## ゲーリー・スナイダー「エコロジー、文学、世界の新しい<無>秩序」

山里勝己（琉球大学）



琉球列島は日本で初めての文学・環境学会国際シンポジウムが開催されるにふさわしい場所である。この列島は、歴史的に台湾や韓国と交流し、中国本土とも長期にわたって密接な関係を保ってきた。ここは海洋文化と大陸文化が出合い、東アジアの北と南の諸要素が接触するところである。このような文化の豊かな混合が沖縄のホスピタリティーや音楽、芸能、長寿を生み出したのである。

ポスト冷戦の時代はとつぜん終焉に向かい、われわれはナショナリズム、宗教的原理主義、先進国の傲慢さ、拡大する環境破壊、世界に充満する貧困などによって国際関係が規定される時代に突入した。「新しい世界秩序」はより大きな無秩序、それもトップダウンの政策による無秩序を露呈するようになった。しかし、無秩序は人間世界では目新しいことではない。

世界貿易センターの崩壊以来、アメリカでは環境は重要な問題ではなくなったように見える。９・１１以降、環境問題は影が薄くなったような印象だ。「自然文学」は一過性の流行であり、エコクリシティシズムや環境倫理への関心などは消え去るだろうと考える古いタイプの研究者や批評家も多い。

しかし、そういうことにはならないだろう。現代人の多くがヒューマンとノンヒューマンの相互依存性を理解しているからだ。自然環境を荒っぽく扱う社会は、異なる文化を持った他者に対しても同様のことをする。エコロジカルな意識の浸透は、自然と歴史の相互関連について深い理解をもたらし、人間は原因と結果について洗練された理解を有するようになった。この４０年間で、すぐれた自然文学の作品が多く書かれ、文学の分野に変化が生じた。いま、新しい文学の領域が出現しつつあるのであり、新しい理論や教育が要請されているのである。

「環境」は、われわれの危機に瀕した生息地であり住処であり、人間はその中で問題ばかり起こしている種なのである。環境は、われわれにとっては生命とエネルギーの源であり、その中で他の生物とともによく生きることがわれわれの大きな課題になっている

文学と環境の分野において、われわれは無秩序に抗して、人間のもっとも深く自然な精神に立ち戻ることができる。無秩序とはもともと人間が生み出したものであることを覚えておきたい。

田園や都市は変化していく現象世界に属する。しかし、野生の世界のみが人間の干渉を受けずに自立して機能することができる。また、人間のどん欲さと不注意のために危機に瀕しているのも野生の世界である。文学の世界で注意を払いたいのは口承文学である。それは生態地域を反映し、ノンヒューマンとの深い一体感をわれわれにもたらす。このような世界はわれわれの研究の領域を拡大してくれるものでもある。

世界の新しい無秩序に言及したが、それでは秩序とはなにか？野生こそが究極の秩序の源である。この世界ではすべてが秩序に従っているのであり、木から落ちていく一枚の葉も秩序のなかにある。無秩序とは人間が造り出した概念でしかない。

東アジアの文明では、人間と自然の間にははっきりとした境界は存在しない。人間は自然の一部であり、高等脊椎動物と同類であるとみなされてきた。東アジアの詩に見られる自然描写の変容はそれ自体がひとつの研究になりうるものであろう。

東アジアの最良の詩人たちの多くは仏教の影響を受けている。環境の観点から言えば、仏教の不殺生という教えは、深遠な示唆を与える。しかし、近年の東アジアの産業や経済成長は、自らの環境だけでなく、第三世界の森林までも破壊するようになった。東アジアの偉大な過去の文学に学びながら、同時に歴史的に前例のない、危機的な現代の状況を語る文学を創造することが求められている。

エコロジカルな文学の歴史を小説の歴史にたとえるとするならば、われわれはいまひとつのターニングポイントにさしかかっている。われわれは見なれた登場人物や魅力的なプロットではなく、登場人物たちの内面や心理の深みや秘密に迫りたいと願うようになってきた。われわれは自然の暗さ、寄生の態様や腐敗の姿を探究する必要がある。また、「エコロジー」という用語の意味を拡大し、「想像力のエコロジー」や「言語のエコロジー」について語ることもできる。エコロジーは、豊かな流動する関係性や複雑さをあらわす言葉なのである。エコロジカルなものの見方は、種や言語や習慣の多様性を尊重する。作家や研究者は、環境について語り自然の代弁をするだけでなく、自らの中に野生の高潔さを顕示しなければならない。

人間は自然を収奪しているが、ノンヒューマンの世界は人間がもうすこし相互性を尊重し、残酷であることをやめてほしいと願っている。そのためには、われわれはギフト・エコノミー（贈り物経済）について理解する必要がある。これはエコロジーの別名でもある。われわれは壮大なポットラックの世界に生きているのだ。このポットラックに参加するものはひとりひとりが招待客であると同時に他者の食べ物となる。われわれはエンタテイナーとして、鹿を食べるときにアイヌが歌うように、自然にお返しをしないといけないだろう。芸術、学芸、深い知恵、そして慈悲の誓いは、株式市場やグローバル経済を混乱させ、ヒューマンとノンヒューマンの現実の世界　それが環境なのである　に対してわれわれの目を開かせる。芸術や芸能はディープな世界における「通貨」なのである。これが人間が本来有する秩序の世界で使用される通貨であり、現代の無秩序に抗する「通貨」なのである。

## シンポジウム１（要約）

### "Nature—Urban, Rural, Wild"

山里勝己（琉球大学）

シンポジウム１は英語で発表が行われた。司会の山里がこのようなテーマを設定した背景について簡潔に説明した。環境文学研究の分野において、従来の原生自然に傾斜した研究ではなく、近年は身近な都市の自然を強調する研究が増えつつあること。例えば、

Michael Bennett と David W. Teague の編集になる The Nature of Cities: Ecocriticism and Urban Environment (1999) や、Karla Armbruster と Kathleen R. Wallace が編集した Beyond Nature Writing: Expanding the Boundaries of Ecocriticism (2001) は「都市や郊外や農業地帯」に読者の注意を向けている。もちろん、これらの先行研究として、William Cronon が編集した Uncommon Ground: Rethinking the Human Place in Nature (1995) をあげなければならない。

アーバン、ルーラル、そしてワイルドな自然環境をどのように作家たちは描いているか。このような問題意識でシンポ１が設定されたのである。

初めにスコット・スロビック氏は、"Space, Tangle, Rot: A Sensory Ecology, through Literature, of the American South"と題して発表した。スロビック教授は、とくに南部出身のフォークナーやウルフや詩人のディッキーの作品を取り上げて分析した。詳細に報告するスペースはないが、(フォークナーは別として)ウルフの小説やディッキーの詩がエコクリティシズムの対象としてフレキシブルに分析されることに、この領域の広がりと柔軟さが感じられた。

## シンポジウム２

## テーマ「アジアの自然と文学」

司会　野田研一（立教大学）

冒頭、富山県が作成した『環日本海諸国図』を OHP で見ていただいた。網野善彦『「日本」とは何か』（講談社）所収の「逆さ地図」である。中国大陸、韓半島、沖縄を含む南西（沖縄）諸島、そして台湾の北端が、日本海、東シナ海を大きな「内海」のように囲み、ほとんど連続していることが分かる。

巽孝之氏は"Towards the Inner Space of Nature Writing: Thoreau, Ballard, Hino"と題して発表、Thoreau, Ballard, Hino を幅広く比較検討しながら、ネイチャ　ライターとしての日野啓三の分析を行った。日野の自然の内面化、特徴的な自然観に言及することで、日本現代文学におけるネイチャ　ライティング研究の豊かな可能性を示唆する発表であった。

シェリル・グロットフェルティ氏は、最近刊行されたネウ゛ァダに関するエッセイと写真のコラボレーションを２例とりあげ、スライドを用いながらハイブリッドなテクストを取り上げることで新しいアプローチのあり方を示した。

最後に発表したボブ・パイル氏の "Extinction of Experience: Lessons from the Urban Wildlands"は、都市における子供たちの自然体験の喪失(体験の喪失)を論じた。都市において、われわれは子供たちの「自然な生息地」を保全する必要があると説き、そこで世界の発見が可能になるとする発表はフロアから活発な反応を引き出した。

シンポ１は、環境文学の豊かさと多様性を示唆し、これからの研究の方向性に大きな示唆を与えるものであった。

発題は、韓国と台湾からお招きしたお二人から始まった。高銀氏は「韓国でもっともノーベル賞に近い作家」と言われ、民主化運動の先頭に立ち続けた闘士だが、たたずまいは温厚そのものだ。氏は世界中に絶滅が危惧される言語が多数あること、自らの言語で語ることの重要性に触れながら、日韓関係、沖縄の歴史と現在を語り、その上で、今後構築さるべき「アジアの自然観」への希望を語られた。劉氏は、台湾における先駆的なネイチャーライターである。環境の悪化に抗しながら、「エコロジー・ルポライター」として活動する意義と同時に、文学的伝統との葛藤がつねにご自身を含む台湾のネイチャーライターの創作活動の根底にあることを指摘された。

日本からは森崎和江氏、崎山多美氏をお招きした。九州と沖縄の作家である。森崎氏は植民地時代の韓半島で生まれ育ち、その自然に育まれた自分と、戦後引き揚げた後に痛感された「内地」日本への異和、韓国への深い罪障感との葛藤を振り返りながら、自然がい

かに深く人を育む場所であるかを語られた。崎山氏は、「沖縄は美しくない」「海や山が嫌い」という挑発的な発言を通じて、自作への他からの評価を中心に、自然をめぐる言説の粗雑さやイデオロギー性、言語的問題を批判的に語られた。

発題者それぞれの社会が急速な近代化のなかで、伝統とエコロジズムの間に大きな葛藤を生じながら、新しい「自然を表現する文学」を探し求める途上にあることが伝わったシンポジウムであった。自然を問題化するとき、私たちはつねに言語とは何か、言語は自然に言及できるのか、あるいは自然の希薄化は言語の希薄化に直結するのではないかといった問題にさらされることを再認識した。環境文学がきわめて本質的に問われたシンポジウムであった。

## 報告　シンポジウム３「環境から何を学ぶか」の討議について

司会　乳井昌史　(エッセイスト/東京農大客員教授)

パネリストとして、加藤幸子、カレン・コリガン＝テイラー、高田賢一の三氏、コメンテーターとして、上遠恵子氏が参加した「シンポジウム３」は、人間中心主義の思想と行動を克服していく重要性への認識を深め、そのための方向性を示唆できたことで極めて意義のある内容になったと思う。

札幌、北京、東京という複数の異なる環境で多様性に満ちた自然や文化に親しみ、その喜びを享受してきた加藤さんは、自らの経験を踏まえて「(自然界の中では) 人間もひとしなみの存在」であると説いた。

その指摘は「みんな　昔からのきょうだいなのだからけっしてひとりをいのってはいけない」という宮沢賢治の「青森挽歌」を引用したコリガン＝テイラーさんの考え方と重なり合う。アラスカのトウヒとツガの森に暮らす自然文学の研究者は、自然の大地を戦場化してきた人間の傲慢さについて詳細に述べたが、それもまた、「アメリカ児童文学と自然」の関りを取り上げた高田さんが、報告の中で示した征服から保護、共生へと変遷してきた自然観に読み取れることであった。

三者三様の意見を展開しながら、その問題意識には、「無秩序の時代には、自然と共に生きることが人類の新たな課題」と言ったゲーリー・スナイダー氏の基調講演の見解に通底するものが感じられた。

それだけに、やりとりの中で加藤さんが、「世界の果ての生き物とも結びついているという感覚を持てるはずだ」と発言したことには意を強くさせられた。それを可能にする手だてが、それぞれが主張した次世代を担う子どもたちへの環境教育であり、文学の果たす役割なのだろう。シンポジウムの結びにコメンテーターの上遠さんが、自然の持つ不思議さに目を見張る感性を子どもたちと共有する大切さを説いたレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」の一節を披露した意味も、そこにこそあったと思う。

終わりにシンポジウム運営の問題になるのだが、私が司会したセクションも含め、パネリスト（講師）同士のやりとりが少ない。せっかくのシンポジウムなのだから、単なる研究報告や意見発表と違うスタイルをもっと明確にすべきでないか。時間の制約があるにしても、できるだけ会場の声も入れながら、壇上の意見交換を盛んにした方が刺激的で、討議の内容も広く深くなる。内外からこれだけの顔ぶれを集めながら、実にもったいない。

## 個人研究発表（3月5日）

### 研究発表要旨

木下　卓（愛媛大学）

吉田美津氏（松山大学）の「"Home--a Place I Know Best"」は、アメリカに逃れたベトナム難民とその子どもたちの作品を2世代に分けて取り上げ、各世代が故国の風景をどう描いているのか、またそれが identity の問題とどう関わっているのかを考察したものである。南ベトナム軍やアメリカ政府軍と関係があった第1世代は祖国の風景を nostalgic な楽園として描き、田園の記憶がベトナム人としての自我意識を支えてはいるものの、自らが祖国への裏切り者であることに深い喪失感を抱いている。
第2世代のアメリカ人の父をもつ Vietnamerican には、帰属を拒否する風景は荒廃したものとしてしか映らない。一方、同じ世代でもボートで脱出した者にも帰属すべき場所はなく、自然は絶対的な他者として立ちはだかり、自分は中心をもたぬ複数の identity で構成されていると感じるのである。

川谷弘子氏（中央大学大学院）の「知性と野生との格闘と和解」は、『老人と海』をヘミングウェイ文学の集大成ととらえ、初期作品をふまえながら人間と自然のありようを考察したものである。自然のなかに潜む野生への挑戦を試みたのがこの作品であると位置づけて、老人の熟練した技と知恵や能力をもってしても超えられない未知の領域があり、それが悲劇的結末をもたらしたと論じながら、自然との多義的な関わりについて考察した。さらに、結末部における明日の舟出を望む老人の姿に知性と野生の格闘ばかりでなく、和解という新たなまなざしを投げかけた研究発表であった。

中垣恒太郎氏（早稲田大学）の「ワイルド・ワイルド・ウェスト」は、マーク・トゥエインの西部体験記『西部放浪記』が彼の西部フロンティア作家としての主体形成に重要な役割を果たした作品であると位置づけて、この旅行記のなかに失われゆくアメリカの光景を克明に記録・再現しようとする姿勢を見て取るとともに、nostalgia とロマンティックな夢想が実際の自然を隠蔽している点を指摘する。そのため、南部出身者でありながら西部作家というブランド・イメージが強調されることになったと論じながら、西部の大自然へのロマンティックな感懐の一方で現実の自然が持つ厳しさに打ちのめされる姿を描き、独特の語り(narrative)のスタイルを編み出すことにつながったのだと論究した。

以上の3名の研究発表はいずれも興味深いもので、一層の深化・発展が期待されるものであった。

## 個人研究発表（3月6日）

### 研究発表要旨

上岡克己（高知大学）

1．茅野佳子（明星大学助教授）「アフリカ系アメリカ人の歴史と環境的不公正――リチャード・ライト『1，200万人の黒人の声』における田舎と都市の環境を読む」

従来ライト研究はもっぱらマイノリティとしての黒人の人間性抑圧に焦点がおかれすぎていたが、茅野氏は今回エコクリティカルな視点から『１，２００万人の黒人の声』を考察し、新しいライト像を浮き彫りにしようとした。ライトが作ったという４０００首の俳句もネイチャーライティング研究の対象になりそうである。

２．山城新（琉球大学講師）「沖縄文学と環境的正義：基地問題と環境問題の接点」
沖縄で開催された今回の国際シンポジウムにとってタイムリーな発表となった。山城氏はシュロスバーグやハーヴィーの主張する「環境的正義」の定義に則り、沖縄という風景の中に基地や開発（公共工事）が沖縄の住民にとってどのような意味をもつかを大城立裕や安里清信の作品に言及しながら考察した。

３．伊藤詔子（広島大学教授）"Williams' *Leap*: From the Utah Desert to *The Garden of Delight*"
伊藤氏は神秘的なボッシュの絵のスライドを使用しながら、ウィリアムズの『リープ』の世界へと聴衆を誘う。いまだ評価の定まっていないこの作品にあえて挑戦し、「時空を越境するジャンル」としてのネイチャーライティングの可能性を探究しようとした。

４．ブルース・アレン（順天堂大学助教授）"Facing the Real Costs of Living: Arundhati Roy and Ishimure Michiko on Dams and Writing"
インドの作家ロイ著『真実の生きるための価値』と石牟礼道子著『天湖』との比較を通して、ダム建設が自然のみならず地域の人々や文化の本質まで深い傷跡を与えていることを詳細に論じた。

以上４人の発表のテーマは、環境的不公正、環境的正義、幻想的ネイチャーライティング、ダム建設と多彩で、日本におけるネイチャーライティング研究の多様性と裾野の広さを痛感させられた。

## フィールドトリップ後記

山城　新（琉球大学）

文学・環境学会国際シンポジウムプログラムの最終日（３月７日）に企画された沖縄県南部地域をめぐるフィールドトリップにはあいにくの天気にも関わらず、４０人余りの参加者が集まった。那覇の首里を１０時に出発し、南風原（はえばる）、与那原（よなばる）、佐敷（さしき）を通り、およそ４０分で最初の目的地、斎場御嶽（せーふぁうたき）へと到着した。当日の天気は曇り。気温は２５度。太平洋から吹いてくる海風は強く、意外と冷たかった。

今回のフィールドトリップには知念村文化財案内講師である金城雄さんにガイドをしていただいた。金城さんは今回のフィールドトリップで昼食をとった地元の「サンライズ知念ホテル」の支配人である一方、知念村の教育委員会から委託のボランティアとして長く地元の歴史遺産の紹介に長く努めている方である。知念さんの案内により一行はウフグーイ、ユインチ、サングーイと呼ばれる斎場御嶽の中の三つの神域を見学した。泥岩と琉球石灰岩によってこの南部地域の地質的特質があるといい、地形はゴツゴツとした岩肌と複雑に入り組んだ岩の組み合わせによって厳かな聖域の雰囲気が創り出されていた。

正午にサンライズ知念で短めの昼食をとり、一行は今回のもう一つの目的地である知念城跡へ向かった。バスを降りた後、登り坂を５分程歩き、更に１０分ほど急な石階段を上っていくと礎石や遺構に囲まれた知念城の敷地内に入ることができた。まだ発掘作業が続けられており、歴史的な背景の全貌が明らかにされるまでにはまだ時間がかかるそうだ。曇り空のせいもあるだろうが、自然石を低く積んだ石垣とうっそうとしたガジュマルやフクギに囲まれた空間はひんやりと冷たかった。斎場御嶽同様、琉球王国の聖地巡拝の行事である「東御廻り」（アガリウマーイ）の参拝地として今でも地元だけではなく県内全域から訪れる人が少なくないという。文化や歴史が文化財として保護されると同時に人々の生活から切り離されていく問題があるなかで、斎場御嶽や知念城跡のように依然と人々の生活の中に神的な力を持ち続ける土地の力の奥深さを感じた。

当初予測していたよりも道路が混雑しており、予定より少し早めに空港に向かうことになり、３時２０分には空港に到着した。少々スケジュールを早めに切り上げざるを得なくなり、参加者の皆様に十分に観光する時間を与えられなかったことが残念であったが、招聘講師の先生方を含めて、参加者の皆様には意外な沖縄を見せてもらったというお言葉をいただいた。少々物足りない部分があったと思われるが参加者の皆様に厚くお礼申し上げたい。加えて限られた時間にも関わらず丁寧に説明と案内して下さった金城さん、加えて喜納育江先生、岩政伸治先生、小谷一明先生には多大なご援助を賜った。運営委員として誰よりも楽しませていただいた。どうもありがとうございました。

## ネイチャーライターの平和希求について——イラク戦争一週間後に

伊藤　詔子　（広島大学）

今日は二〇〇三年三月二七日。世界中で高まりをみせた"No War, Stop the War"の反戦デモの叫びも空しく、二〇日に発せられた「アメリカの大義」に基づくブッシュ大統領の開戦宣言以降激しい戦闘が続き、双方に多くの犠牲者をだしながら、今日にも米英軍などのバグダッド侵攻と、それを迎え撃つ「共和国防衛隊」との激戦が予想されている。テレビで見る限り首都やバスラなど都市以外は、イラクの大砂漠が、昔世界史で文明発祥の地として習ったチグリス、ユーフラテス川の横、延々と続いている。

メディアでは全く報じられないのが、この戦争が傷つけているイラクの大地の問題である。どんなに厳しい気候でも、砂漠が決して「地図上の空白」ではないことは、テリー・テンペスト・ウィリアムズの『鳥と砂漠と湖と』やエドワード・アビーの『砂の楽園』を引くまでもない。アメリカの砂漠だけが「楽園」と「魂の家郷」なのではない。先祖伝来の人々の生活の風景であり多くの生き物が住む大地は、地球上どこでもホームに違いない。

９．１１以降「アメリカの大義」形成の厳しい状況のなかでも、ネイチャーライターたちはそれぞれの立場から発言を繰り返してきた。中でも環境雑誌の草分けである *Orion* を発行している The Orion Society は、www.oriononline.orgを通じて作家の意見を掲載してきた。それらの一部と書き下ろしを纏めて小冊ながら本の形として二〇〇二年出版されたのが以下の二冊である。Wendell Berry, *In the Presence of Fear: Three Essays for a Changed World*; Richard Nelson, Barry Lopez and Terry Tempest Williams, *Patriotism and the American Land.*

(Great Barrington, MA: The Orion Society)。

ベリーの本は三つの論文から成り、その第一部「恐怖の現前の中での想い」(Thoughts in the Presence of Fear)でベリーは「国家的危機に際しては思考に代わりレトリックに皆取りすがる傾向があるが、それには抵抗しなければならない」と語る。この論文はオライオン電子マガジンでも読めるので、ここでは主に後者『愛国主義とアメリカの大地』について紹介したい。これはネルソン、ロペス、ウィリアムズという三人の代表的な現代ネイチャーライターが9．１１とアメリカの愛国主義とアメリカの大地の関係を語った注目すべき作品で、序文を書いたシリーズの責任者、マリオン・ギルマンが語るように「愛国主義の真の意味は何かについて各作家の本質的な回答」を収録したものだ。表紙には破れた星条旗が刷られ、驚くことに三人の論文は、およそ半年後と思われる今日の事態を、ほぼ正確に予測してもいる。ネルソンは「環境保護論者はアメリカの大地のパトリオットであり、ネイティヴ・アメリカンは我々よりずっと以前から」エコロジーの諸々の知や「足下の大地への愛に基づくパトリオットではなかったか」とし、"New Patriotism"を提唱する。ロペスは「ここ二〇〇年ナチュラリストの仕事は重要性をどんどんいや増している」と始め、

「フィールド・バイオロジー又はそれへの綱領のない政治」は「地獄の門へのヴィジョン」

であると結んでいる。

『リープ』出版以降益々環境アクティヴィストとしての動きを活発化させているウィリアムズは、ニューヨークの現場へユタから巡礼して巡り会ったソーホーでの9．１１写真展示会の話から始め「平和は記憶の行為である」と感銘深い言葉を伝えている。ついでカーソンを真のパトリオットとして捉え直し、9．１１以降「京都議定書」からの撤退をはじめアメリカが環境政策を後退させているのはよく指摘されるが、『沈黙の春』出版当初の、産業界を初めとするアメリカ社会からの非難とカーソンの闘いを辿り「アメリカは独立（independence）よりも[エコロジーの原理である]相互依存（interdependence）に目覚めなければならない」としている。

ウィリアムズは最近も *The Poetry of Peace* (Santa Barbara, CA: Carpa Press, 2003)の序文で「平和は記憶の行為である。戦争は忘却の行為である。でなければ人間の苦しみを何度も繰り返すはずがない」と繰り返す。この詩集は6部から成っていて、第1部は「地球風景」(Earthscape) 第2部は「記憶」(Memories)と続き、やはり「恐怖」を乗り越えていこうとする詩が連なっている。こうした大地の文学の思想が、アメリカと世界を動かす日が来ることを切望せずにはいられない。

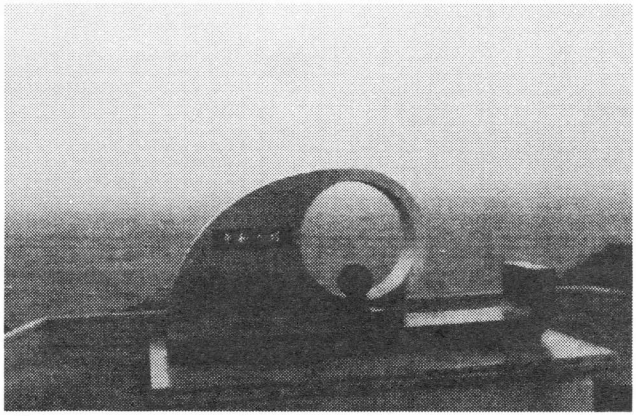
## 沖縄本島一周ツーリング

大神田丈二　（山梨学院大学）

３月６日木曜日。

宜野湾市大山にあるハーレーダビッドソン沖縄の店頭には、２日間旅の相棒

になるワインレッドとブラックのヘリテッジ・ソフテイル・クラシックが待っていた。1450cc の排気量を誇る鉄馬である。その迫力に圧倒される。はたして乗りこなせるだろうか。11 時、出発しようとすると、無情にもまた雨が降り始めた。沖縄に上陸して



３日、いまだに太陽の顔を拝んでいない。レインウェアを着用して出発する。今日、第１日目は、沖縄本島南部の海岸線を反時計回りに回り、時間に余裕があれば中部まで足を延ばすつもりである。　建設中のモノレールの高架に

沿って 58 号線を那覇空港方面に向かって南下する。途中、ひめゆりの塔、平和記念公園の標識を見て、国道 331 号へ。那覇市内に比べればよほど交通量は減ったが、雨は激しさを増すばかりである。

いつもツーリングのときに覚える高揚感、解放感がない。喜屋武岬に着いたのは正午を少し回ったころである。あまりの吹き降りに他の観光客たちは逃げるように去っていく。荒れ狂う岬に一人取り残された。手すりにつかまって眼下の海を見れば、岩に怒濤が押し寄せている。

岬には海に向かって青いモニュメントが建てられていた。円形に刳り貫かれた中央部分に球が鎮座していた。昨夜、高良勉氏が朗読した「喜屋武岬」という詩に、

おびただしく流された
血の跡に
拡がる緑の芝草
ひかりの中
現代彫刻の〈平和の塔〉

くりぬかれた塔の中心に
一つの 球
その彼方に
果てしなく開かれた
青い海原と空の南

とあったのが合点がいった。

喜屋武岬とはちがい、ひめゆりの塔は観光客であふれていた。駐車場は満車である。通りすがりに見れば、ツーリング中のライダーが 2 人いた。どうやら物好きは私だけではないらしい。12 時 50 分、閑散とした平和記念公園でしばし休憩する。

国道 331 号はしばらく内陸部を走っていたが、やがてまた海が見え始めた。道路が段丘上を走っているので眺めは抜群のはずなのだが、海は暗く雨に烟っている。島が見える。橋が架かっており、オートバイでも渡れそうだが、今回は断念する。地図によれば奥武島というらしい。

午後 1 時 40 分、知念村の宇原というところで給油。走行中はウィンドスクリーンに守られて気づかなかったが、さらに雨は激しくなったようだ。屋根のないガソリンスタンドであったにもかかわらず。大雨のときに雨樋から雨水があふれるように、空から水がこぼれてくる。ガソリンタンクに当たって飛沫を上げる。店員がガソリンタンクのキャップを外す。ガソリンタンクに雨水が流れ込みそうだ。

グローブだけではなく、ついに靴の中にも雨水が浸入してきた。パンツも濡れているようだ。首の辺りから進入した水が肩から腕までをぬらしている。次に那覇の標識を見たら気が挫けてしまうかもしれない。すべてを諦めてホテルに帰りたくなるのではないか。

ライダーはさすがにもう限界かなと自信を失いつつあった。しかし、オートバイの方はちがった。雨も風もどこ吹く風、相変わらず豪快な音を立てながら、威風堂々と走っている。何とも頼もしいやつだ。

やがて市街地に入り、交通量が増えてきた。与那原町というらしい。那覇という標識があり、車がそちらの方向に流れているのを見て、そのまま流れに乗って帰れば楽だろうなとまたもや気持ちが揺れる。しかし、このまま帰途につくのはいかにもくやしい。午後もまだ早い。

与那原町の信号を右折し国道 329 号に。さすがに空腹を覚えた。西原町、中城村と走りながら食堂を探す。沖縄はやけに弁当屋が多い。雨が小降りになる。右手にときどき海が見える。

適当な食堂が見つからないまま、北上を続けていると、「海中道路」という標識が目に留まった。バイクを停めて地図を開く。海中道路を走れば、平安座島、伊計島に渡れることがわかった。伊計島まで渡れば、第1日目のツーリングのハイライトになるにちがいない。

モスバーガーでおそい昼食をすませる。あたたかいスープとコーヒーが何よりのご馳走だった。レインウェアの下にジージャンを着た。

海中道路は沖合に横たわる平安座島に真っ直ぐ延びているように見えたが、
実際には真ん中辺りで左に折れ曲がっていた。最初は橋なのかなと思ったが、名前どおりに海中道路で、ちょうど引き潮の時間だったのか、道路の両側は干潟になっていた。

干潟には、波で下部だけが浸食されて独楽のような形になった岩がいくつも並んで立っている。右手前方には、浜比嘉島と立派な橋が、正面と左前方には、平安座島が見えるが、海中道路から見ると、平安座島はさほど大きな島には見えない。

平安座島を伊計島に向かって走る。途中、石油備蓄基地があったので、海中道路が作られたいきさつがわかったような気がした。道路もよく整備されている。しかし、それも石油基地までで、そこから先は、鋪装こそされているものの、道幅は狭くなった。

村落を通り抜けると、景色も荒涼としてきた。ふと、懐かしい景色に出会ったような気がしてオートバイを停める。そこからは道路は海に向かって下り坂になり、海岸の手前で左に曲がって崖の向こうに消えていた。何ということもな
い景色なのに、どうして懐かしさを覚えたのだろうか。

さほど長くない橋を渡ると伊計島である。島は農業も盛んらしく、サトウキビかパイナップル畑などが広がっておりその向こうに海が見えた。気持ちのよい風景だ。さらに先に行くと、前方に大きな建物が現れた。ホテルだった。駐車場には大型バスが並んでいた。

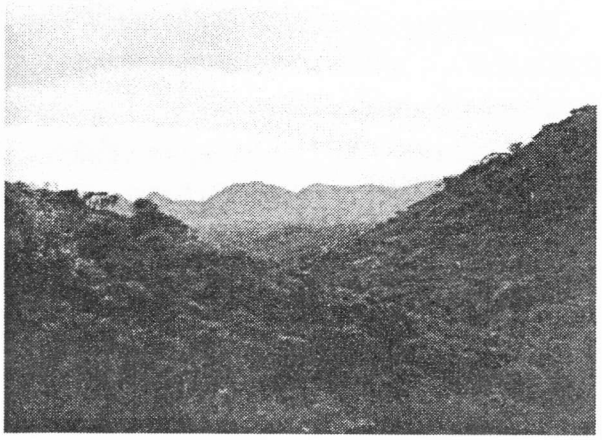
もう少し島の中を走りたかったが、道路の状況が不明だし、大きな音をたてるオートバイで島の静かな生活を乱す気になれず、引き返すことにした。海中道路でもどる前に、橋を渡って浜比嘉島にも立ち寄ってみた。

7時過ぎホテルに帰着。1日目の走行距離は194キロである。

3月7日金曜日。
今日こそはと天候の回復を期待したが、沖縄自動車道を北に向かって巡航中またもや雨が降り始めた。気温も昨日よりも低い。

8時40分、中部の石川インターで高速を下りる。レインウェアを着用していると、雨が急に激しくなった。天を仰ぎ、一瞬、涙がこぼれそうになる。インターを出入りする車の運転手や観光バスの乗客たちがちらっとこちらを見る。その何気ない視線に傷つく。しかし、いままでも悪天候に泣かされたことは何度もあるではないか、と思い直す。オートバイが故障して途方に暮れたことも一度や二度ではなかったはずだ。国道329号を右手に波静かな金武湾見ながら走る。金武町はいかにも景気が悪そうだった。国道沿いの埃っぽい商店の多くはシャッターを下ろしたままである。あるいはまだ開店前だったのかも知れないが、シャッターを上げても街に活気がもどることがあろうとは思えなかった。

金武町を過ぎると、国道は急に車が少なくなった。雨もいつしか止んでいた。両側に人家が点在する丘陵地帯が続く。道路は、カーブが多く、アップダウンが適度にある。沖縄に来て初めてツーリング本来の楽しさが味わえた。人間なんてどこまでも現金なものである。空も心なしか明るくなったように見える。 国道 329 号から東海岸に沿って走る国道 331 号へ。くすんだ緑色の、鳩よりも大型の鳥が車に轢かれたのだろうか、死んでいた。急な山道を下ると、小さな湾（大浦湾）に出た。いかにもわびしい風景である。快晴であればまた違った風にも見えるのだろうが、曇天の空の下では、いかにも過疎の地という雰囲気が濃厚にただよっている。ときどき集落があり、集落の手前もしくは集落を過ぎたところに、沖縄独特のお墓、亀甲墓が海に向かって並んでいる。生者が住う家屋よりも死者の住む墓の方が立派に見える。墓地の方がにぎやかに見える。



平良で国道 331 号に別れを告げ、東海岸を辺戸岬近くまでつづく県道 70 号線へ。11 時、洪水時に福地ダムの水を排出する施設を展望できる駐車場で休む。正面にすり鉢を伏せたような形のよい山があり、暗緑色の地に、若葉だろうか鮮やか緑が一面に広がり、何とも美しい。そんな緑の森、ヤンバルの森が目路遥かまで広がっている。振り返れば、海も見える。

交通量も人家もいよいよ少なくなるばかりである。1 台の車ともすれ違わない時間がつづく。寂しい海岸を走り、はるかに海が見える高原を走り、樹木の生い茂った渓谷を抜ける。寂しさを紛らわせてくれるのはオートバイの鼓動とエンジン音だけだ。

ガソリンの残量が心配になってきた。しかし、小さな集落はあっても、ガソリンスタンドは見あたらない。ようやく小さなガソリンスタンドを見つけてほっとしたのも束の間、ハイオクはないという。次のガソリンスタンドにもハイオクはなし。しかたがないので、運を天にまかせ、ともかく辺戸岬を目指すことにした。

予定どおりにほぼ正午に辺戸岬に到着。天候が天候であるだけに、駐車場は閑散としていた。海から冷たい風が吹きつけている。記念碑のあるところまで歩いていくと、岬の岩に大波が打ち寄せて、真白い波しぶきを上げている。喜屋武岬でそうだったように、先に来ていた中年の婦人 2 人が去ってしまうと、またもや 1 人取り残される。右が日本海で左が東シナ海と記されてあったが、もちろん海に線が引かれてあるわけではない。

昼飯の時間だったが、岬の食堂は開店休業中のようなものだった。敢えて食べようという気になれなかった。せっかく 4 時間あまりかけて沖縄本島最北端までやってきたというのに、辺戸岬での実質的な滞在時間は 10 分ほどである。

辺戸岬から大宜味村に至る国道 58 号線は解放感のあるすばらしいシーサイドラインだった。右手には東シナ海が広がっており、晴れた日の夕刻にはきっとすばらしい日没も楽しめるにちがいない。天気が悪く、時刻が早いことが残念だ。

しかし、東海岸の恐いほど寂しい道を走った後では、もうそこに何ら魅力は感じられなかった。東海岸では孤独な旅人を気取っていられただけ幸せだったということだろう。でも、ここではもうどんなに頑張っても一介の観光ライダーだ。那覇までの百数十キロを残して、旅はすでに終わってしまったようだ。悪天候の中、2 日間かけて何とか沖縄本島をほぼ一周することができた。2 日目の走行距離は 328 キロ、2 日間の合計走行距離は 522 キロであった。

# 追悼　石井倫代さん

野田研一（立教大学）

石井倫代さんが、2001年5月15日急逝されて、2年近くの時間が過ぎようとしている。芝浦工業大学教授。英米演劇を専門とされ、コロンビア大学から博士号を取得されていた。初めてお目にかかったのはいつのことか、もはや思い出せない。しかし、ASLE-Jの設立に向けて最初に有志20人ほどが集合した、新宿の居酒屋「千草」がその日だったような気もする。Scott Slovic氏がいつも話題にする酒と紫煙に包まれたASLE-J誕生の集いである。

それから、6年間、石井さんは役員としてずっとこの学会のために働いて下さった。最初は運営委員、最後の2年間は会計の重責を担って下さった。草創期の学会は組織も事務体制も整備されておらず、財政を担う会計の仕事も繁雑を極めたが、電話を下さる石井さんの声はその意思と同様いつも明快で、当時代表として仕事をしていた私にとっては大きな後押しだった。

しかし、学会運営上のお付き合い以上に、石井さんとの電話を介したちょっとした会話も楽しみだった。石井さんも私も日本の戦後詩人たちが大好きで、いつか吉本隆明の『固有時との対話』や清岡卓行、あるいは田村隆一や谷川雁などを再読する会をやりたいですね、といった話をしたことがある。ミネルヴァ書房から刊行されている『たのしく読める・・・』シリーズのような企画が、学問の秘教的性格を相対化する上でいかに重要であるかといった指摘などは、このシリーズに多少はかかわり、かつその通俗性について批判めいた言葉を耳にする者としては、有り難いコメントだった。

石井さんは、いつもどこか違う場所からアカデミズムやASLE-Jの活動を見ておられた。その独自の視点を何と表現すればいいのか、いまだに明確にならないが、同時代を生きた人でありながら、おそらくはそのある時期をアメリカで生きられ、かつできればそのままずっとアメリカで生きることを考えておられた人の視点なのかも知れないと思うことがある。

2000年のASLE-J年次大会は10月15日・16日、京都で開催された。この役員会、総会で会計報告を行う準備を石井さんはなさっていたが、直前に出席をキャンセルされた。体調が悪いので検査入院しなくてはならないとのお話だった。会計報告のまとめの作業が負担だったのではないかと思い、報告と予算案の提案は私が代理しますとお伝えした。書類は完璧だった。無事京都大会も終わり、ひと息ついたところでお礼を兼ねてお電話したところ、いつもの澄んだ明瞭な声で発病について言及された。電話口の私はみっともないほどしどろもどろだったに違いない。やがて、ほどなく退会届を提出された。

石井さんのお仕事のひとつにTerry Tempest Williams, *Refuge*の翻訳、『鳥と砂漠と湖と』（宝島社）がある。この翻訳を契機とするWilliamsと石井さんの交友については、同書の「あとがき」で石井さんが書いておられる。ほとんど毎週のようにふたりは電話で翻訳上の問題について言葉を交わしておられたようだ。Williamsはたんなる翻訳者としてではなく、ひとりの個性としての石井さんを知ろうとしたようであるし、石井さんもそのような出会いを大切にしておられた気がする。石井さんの訃報に接して、Williams女史がいかに嘆き悲しんだかは、彼女から届いたE-mailが物語っていた。

Scott Slovic氏が来日した昨年春、一緒に石井さんのお母様をお訪ねすることができた。遺影の前でお母様はいろいろと気さくにお話下さった。そのさりげなく優しいお心遣いが、むしろ、お悔やみにうかがったはずの私たちにとって心の慰安となった。石井さんにお目にかかることはもはや叶わないが、この場を借りてひと言、お礼を申し上げたい。石井さん、いつも有り難うございました。

# 石井倫代さんの思い出

スコット・スロヴィック（ネヴァダ大学リノ校）

2002 年 5 月、野田研一氏と私は東京に住んでおられる石井倫代さんのお母さんをお訪ねする機会を得ることができた。悲しい訪問だった。私たちは哀悼の意を表するとともに、石井さんの思い出のいくばくかを分かち合えればと願っていた。お母さんは石井さんの仕事についても、研究上の同僚についてもほとんどご存じなかった。この訪問が実現するまでに、野田氏は何日も電話をかけ、E-mail を書いていた。お宅にお邪魔すると、お茶と林檎と苺をいただきながらお話しした。会話に差し挟まれたのは涙ではなく、微笑と静かな笑い声だった。石井さんのお母さんと野田氏は日本語で話していた。私はふたりを見つめ、耳を傾け、近くの書棚の上にある石井さんの美しい写真に見入っていた。

お母さんを目の前にしながら、そして石井さん自身の写真を見つめながら、私は石井さんとの思い出に耽った。1993 年 9 月から 1994 年 8 月にかけて私は彼女にお目にかかる機会が少なくなかった。当時私は東京に住み、大学で教えていた。じっさいどういう形で出会うことになったのかは思い出せない（たぶん、高田賢一氏と外岡尚美氏を介してのことだったろう）が、彼女はすぐにネイチャーライティングについて語り合う月例会のレギュラーメンバーになった。この集まりは、その後 Tokyo Nature Writing Study Group として Bruce Allen 氏に引き継がれることになる。石井さんはこの会の設立メンバーのひとりだった。すでに 8 年以上も経過しているため、どんな集まりだったか、どんな議論をしたか、正確に思い出すことは困難だ。私の記憶にあるのは、石井さんの柔らかな声と明晰な英語だ。この集まりでの会話はもっぱら学問的な問題に集中していたので、石井さんの私生活についてはもちろんのこと、大学院時代のアメリカ生活についてさえ話をうかがう機会はなかった。

石井さんのネイチャーライティング研究へのかかわりは、Study Group だけでなく、いまや現代ネイチャーライティングの古典とされる Terry Tempest Williams の *Refuge: An Unnatural History of Family and Place* の翻訳に取り組むという決断にも示されていた。1990 年代に宝島社が刊行した翻訳シリーズの一書だ。思い出すのは、1994 年、石井さんがこの作家を訪問する際にお手伝いをしたことだ。石井さんはソルトレイクシティーから葉書を送って下さった。その葉書はいまでも私の *Refuge* の頁の間に挟み込んである。もう 1 通の葉書には「1995 年 7 月 10 日」の日付がある。この葉書は完成した訳書『鳥と砂漠と湖と』とともに送られてきた。その最後の一文にはこう記してある—「私は、あなたの許可も得ないまま、あなたのことを〈あとがき〉に書いてしまいました。お許し下さいますか？」

この葉書と訳書を受け取った数週間後、私はふたたび東京にいた。ネイチャーライター、リック・バスとの旅だった。到着したその日の夜、新宿の居酒屋「千草」で歓迎会が開かれた。あの何ともアイロニックな ASLE-Japan 誕生の場所だ。石井さんもたくさんの ASLE-J メンバーたちとともに来ておられた。初めて会う雑誌編集者の方々もおられた。1995 年のこの邂逅では言葉を交わす時間は多くはなかったけれども、石井さんの顔を見て、心の籠もった言葉を二言三言交わすだけでもほっとする思いだった。

石井さんの友人誰もがそうであるように、私も彼女の発病そして死の報に接して深い悲しみのなかにある。彼女は日本滞在中の私にとってこの上なく頼りになる友人であったし、来るたびにお目にかかるのを楽しみにしていた友人だった。また、時に応じて送られてくる葉書や手紙も楽しみだった。いま、私は送っていただいた葉書を手に取り、あの訳書を手に取っている。そして、お母さんのお宅の書棚にあった写真のなかの石井さんの面差しを心に浮かべ、また娘さんの記憶をたどりながら野田さんに静かに語りかけていたお母さんの微笑を思い浮かべている。（原題："Memories of Michiyo" 野田研一訳）

## 書誌情報

『岩波講座 文学７－ つくられた自然』（岩波書店、2003年）たぶん「自然」は、人間が意識あるいは言語をもって以来、一度も自然であった例（ためし）がない。「自然」とはまさに、本書のタイトルにあるように、「つくられた自然」であって、意識という額縁があって初めて目に見える存在になったのだといえよう。しかし、このことを賢しらに指摘することに意味があるわけではない、というのが本書の編者・執筆者たちの共通理解・出発点であることは指摘しておく必要があるだろう。なぜならば、このカルチャライズされた「自然」こそが現代を生きるわれわれの内と外の現実であり、それゆえに人間はその現実を無視できないが、一方、その事実に対して、人間（＝身体）はつねに違和感を覚えざるをえないからである。それは、誤解を恐れずに言えば、国家と個人の関係に似てなくもない。文学に表象された「自然」が一筋縄ではいかない文化の政治学を内包するゆえんである。本書は、日本関係の論文５本、イギリス関係３本、アメリカ関係２本の計10本の論文からなり、各論文とも力作であり、「自然」もしくは「自然」をめぐる将来の文学研究の指標になることは間違いないだろう。なお、最後に、ASLE-Jのメンバーである野田研一氏と石幡直樹氏も執筆陣に加わっていることも付け加えておく。（大神田丈二）

上岡克己『アメリカの国立公園』（築地書館、2002年）アメリカの自然環境史を語る際に不可欠な国立公園の歴史が、自然保護運動と「開発派」の戦いを中心に分かりやすく解説されており、自然観や環境意識の変遷と合わせてアメリカにおける自然と人との関係をまとまりやすく理解することができる。代表的な国立公園の美しい写真が目を楽しませてくれるばかりでなく、巻末の国立公園史年表などの国立公園に関する資料、日米にわたる豊富な参考文献も充実しており、日本におけるアメリカ自然環境史の貴重な参考書の一つとなっていくと思われる。
（横田由理）

田中修三篇著『基礎環境学ー循環型社会をめざして』（共立出版、2002）
２１世紀は環境の世紀と言われ、大量廃棄型社会から循環型社会への転換が求められている。その中で、本書は循環型社会をめざした環境学の入門書として、その基本的な情報や概念を整理したもので、環境学を循環型社会という切り口から解体・再構築することを試みている。文学の視点から環境を研究する私たちにとって、このような理工系・社会系の研究者による環境書は、新たな視点をもたらし視野を広げてくれるものと思う。
（茅野佳子）

フィリップ・シャベコフ著　しみずめぐみ/さいとうけいじ訳　『地球サミット物語』（ＪＣＡ出版、2003年）ニューヨークタイムズの記者であったシャベコフの２冊目の訳書。アメリカの自然観や環境主義の流れを扱った前著『環境主義』を、世界のレベルにまで敷衍する。中心に１９９２年にリオデジャネイロで開催された地球サミットがおかれている。複雑な政治経済のもとで、国連を中心とした地球規模での環境対策が切実に求められている。私たち人類が大変難しい時代に突入したことをあらためて知り、いまこそ人類の英知が問われていると著者は語る。
（上岡克己）

保屋野初子『川とヨーロッパ--河川再自然化という思想』（築地書館）
長野県出身で、脱ダムを扱った『長野の脱ダム、なぜ？』はご存じの方も多いと思います。新著は「氾濫原を再生する」という方法によって川の生態系を回復し自然再生に取り組むとともに「あふれさせることによって治める」新しい治水概念を確立したヨーロッパの「河川再自然化」のありようを紹介するものです。保屋野氏が本書を書くきっかけとなったのは、オランダ、ドイツ、オーストリアへの2000年夏の取材旅行だったそうですが、その後、日本でも氾濫も視野に入れた河川審議会答申、脱ダム宣言とその広がり、そして自然再生推進法が成立し施行されるに至りました。著者はヨーロッパの政策転換を日本の水政策にどう生かすことができるだろうかと考えながら紹介を試みています。
（中西須美）

山影　隆『幻視の地へ』(松柏社、2002年)
2001年1月に急逝された新潟大学教授山影隆氏の遺稿論文集。氏は1945年生まれで新潟大、都立大で学び1972年以来新潟大で教鞭を執った。本書は現実的世界にいかなる超越的存在を求め得るかをダンテなどに探ったヴィジョン論、ユングを手がかりに幻視体験による自我の変容をブレイクなどにたどった変容論、男性的な自我が無意識に求めた母性的な詩女神を追って地誌的風景詩へと至るミューズ論、そして土地の精霊と一体化した詩女神に導かれてクレアやドロシー・ワーズワスを論究する自然論の４章から成る。『文学と環境』第３号掲載の絶筆「なぜ田園（カントリーサイドなのか」が掉尾を飾り、そこで扱ったスーザン・ヒルの『魔法の林檎の木』をテーマにした絵画を口絵とする。本書に展開される広範なテーマは、氏の文学者・詩人としての考察の幅広さと奥深さを伝えて余りある。氏は『楽しく読めるネイチャーライティング』にも２編寄稿されている。ASLE-J に加入した1999年頃からは、クレアやドロシーに倣い角田遊行人と号して私家版『里山自然倶楽部誌』に「自然日誌」を執筆された。自宅に近い角田山麓の水芭蕉、藪椿、雪割草を愛で、ギフチョウを追ってかたくりの群生地を見つける日々を淡々と書き留めたエッセイは心が安らぐ。本書の刊行と同時に詩集『織芙杳子（オルフエウス）詩集』も刊行されたことを付記しておきたい。(石幡直樹)

リンダ・リア著　上遠恵子訳　『レイチェル：レイチェル・カーソン『沈黙の春』の生涯』(東京書籍、2002年)
翻訳で７００ページもあるレイチェル・カーソン伝の決定版。個人的にはポール・ブルックスの伝記『レイチェル・カーソン』が好きだが、この詳細な伝記から新しいカーソン像が生まれるかもしれない。それにしても著者リアは徹底的な調査をして詳細なカーソン像をつくりだす。例えば彼女の幼年時代や大学時代のことがブルックスの伝記よりもかなり詳しく語られている。貴重な写真も挿入され、カーソン愛読者にはたまらない一冊となろう。
(上岡)

Thoreau, Henry David. *Journal Volume 8: 1854.* Princeton UP, 2002
プリンストン版ソロー全集の『日記』第８巻で、１８５４年２月１３日から９月３日までを扱う。この時期『ウォールデン』の出版や逃亡奴隷事件があったが、この時期の日記の特徴としてナチュラリスト・ソローによる詳細な自然描写（フィールドノート）が大半を占める。毎日の散歩が新しい自然発見へとつながる「地球はそこに住む生物の多様性ゆえにより豊かである」（５月１８日）という認識が『日記』第８巻を要約している。
(上岡)

Adamson, Mei Mei Evans, and Rachel Stein. *The Environmental Justice Reader: Politics, Poetics and Pedagogy.* Tucson: U of Arizona P, 2002.
文学的アプローチで環境的正義／公正を扱った最初の論文集ではないか。編者は環境文学研究における多文化的アプローチの必要性を積極的に訴えて来た ASLE-US の会員である。確かに環境的正義の必要性をこれからの不可欠な視点として論じている点でどの論文も力強いが、果たしてこれらの試みは人間中心主義に陥るという矛盾を生じさせはしないか。環境的正義で生態中心主義は有効に論じられるのか。(あくまで環境文学研究における）これまでの、そしてこれからの環境的正義の方向性を考える上で確かに重要な一冊。
(山城新)

Birnbacher, Dieter (ed.). *(Oe)kologie und Ethik, Bibliographisch erg(ae)nzte Ausgabe.* Stuttgart: Philipp Reclam Jun., 2001.
初版は1980年で、20年ぶりに文献が増補されている。主に70年代の議論を収めた環境思想の古典的な読本。特徴は環境学、神学、法学といった様々な学問領域の論者の作品が収められていることにある。ただし、収録作品と参考文献が少ない。授業でのテキストとして最適。テキストはドイツ語。
(久高将晃)

Fox, Nicols. *Against the Machine: The Hidden Luddite Tradition in Literature, Art, and Individual Lives.* Washington, D.C.: Island Press,

2002.
ネイチャーライティングの伝統を注意深くみてみると様々な政治的文化的イデオロギーが埋め込まれているのがわかる。レオマークスのアネットコロドニー、あるいは（やはり！）ソローのウォールデンなど、枚挙にいとまがない。この著者は必ずしもネイチャーライティングを中心に論じているわけではないけれど、また少し違った角度からアメリカ文学と環境運動の流れを見せてくれる。
（山城）

Krebs, Angelika (ed.). *Naturethik: Grundtexte der gegenw(ae)rtigen tier-*
*und (oe)koethischen Diskussion.* Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1997.
クレーブスの編集による自然の倫理学の読本。第一部では動物の倫理学、第二部では環境倫理学を扱っている。タイトルからも明らかのように、自然の倫理学という言葉で動物および環境倫理学を包括している。ピーター・シンガーやアルネ・ネスといった論者だけではなく、ハンス・ヨナスやユルゲン・ハーバーマスといったドイツの論者の作品も収められている。主に英米の論者が紹介される日本では貴重な論集かもしれない。また巻末には編者クレーブスの非常に手際よくまとめられた自然の倫理学の概観がある。ただし、少し哲学よりの編集。授業でのテキストとして最適。テキストはドイツ語。
（久高）

Krebs, Angelika. *Ethics of Nature.* Berlin/New York: Walter de Gruyter,
1999.
自然の倫理学における議論を包括的に論じた著作。第一部で自然の倫理学の基本的概念を定義し、第二部から題四部までは自然の倫理学の議論を三つに分類して簡潔に論じている。著者クレーブスはフランクフルトやオックスフォードなどで学び、特定の学派にとらわれない幅広い視点の持ち主。また英米の論者だけではなく、ドイツの論者も考慮されている。彼女の著作ほど、自然の倫理学を明瞭かつ正確に概観した著作はなかったのでは。バーナード・ウィリアムスの序文付き。テキストは英語。（久高）

Light, Andrew, and Holmes Ralston III, eds. *Environmental Ethics: An Anthology.* Malden, MA: Blackwell, 2003.
最近ぞくぞくと環境思想、環境史、環境哲学関連の概説書が揃いはじめた感があるが、アメリカ環境倫理をおそらくもっとも包括的に説明してくれる本の一つではないか。「環境倫理は何か」という章に始まり、エコフェミニズム、ディープエコロジー、環境的正義、環境保護／保全の問題、人間中心主義と生態中心主義等、最近の議論まで言及している。
（山城）

Nelson, Richard, Barry Lopez, and Terry Tempest Williams. *Patriotism and*
*the American Land.* Great Barrington, MA: The Orion Society, 2002.
現代アメリカを代表する３人のネイチャーライターライターが、ポスト 9.11 状況を批判的に見据えながら真の愛国主義について語る。ネルソンはアラスカ先住民、ロペスはナチュラリスト、ウィリアムスはレイチェル・カーソンに、あるべき愛国心のかたちを見い出している。いずれの場合も核にあるのは＜自然界への服従＞だ。政権批判とエコロジカルな倫理観がリンクしているわけだが、それは反体制の準拠枠を＜自然に求めてきたアメリカの思想的伝統だと言えるだろう。
（結城正美）

## ✧ 事務局よりお知らせ

*本学会主催により国際シンポジウムが３月に開催されたため、今年度は秋の全国大会、ならびに総会は開催されません。(総会での決定事項)

２００３年度スケジュール
５月２５日　第２回役員会
８月末　　国際シンポジウム記念論集　原稿〆きり
９月末　　『文学と環境』No. 6　発行
１０月　　第３回役員会

## ✧ 入会・変更・大会窓口

ASLE-Japan/文学・環境学会
事務局：琉球大学　法文学部
喜納育江研究室内
〒903-0213 沖縄県西原町字千原１番地
Tel/Fax: 098-895-8291
E-mail: ikuekina@ll.u-ryukyu.ac.jp
今年度の会費をまだお支払いになっていない方は、お早めにお願いします。

郵便振替
口座番号：01380-1-56784
加入者名：(ASLE-Japan/文学・環境学会)

## ✧ ニューズレターに原稿をお寄せください！

エッセイ、学会報告、授業のシラバス等、ニューズレターへの原稿をお待ちしております。尚、電子メールでのご投稿の際には、念のためニューズレター編集委員全員宛（kamioka@cc.kochi-u.ac.jp,
）にお送りください。

## ✧ あとがき

第１４号は３月に開催された国際大会をメインにしています。関係者の皆様本当にご苦労様でした。ネイチャーライティングへの新たなアプローチの始まりの予感がします。また逝去された石井さんの遺志を継いでいくのも会員に課せられた責務でしょう。今回も内容が盛りだくさんになりました。若い編集者によるところが大です。(K)

【発行】
ASLE-Japan/文学環境学会
事務局：琉球大学　法文学部
山里勝己研究室内
〒903-0213 沖縄県西原町字千原１番地
TEL/Fax: 098-895-8295
E-mail:yamazato@ll.u-ryukyu.ac.jp

【編集】
編集代表　上岡克己
〒780-8520 高知市曙町 2-5-1
高知大学人文学部
TEL/FAX: 088-844-824
E-mail:kamioka@cc.kochi-u.ac.jp